

北海道深川市納内町

良食味品種のいもち病感受性と温暖化により いもち病発生リスクが高まり オリゼメートを導入した



鈴木さん2世代

陽志さん
(昭和40年生まれ)
省吾さん
(平成2年生まれ)

深川市は北海道中部、石狩平野北部の市。納内町は深川市の東部に位置し、東・南端は旭川市と接している。また、町の南端に石狩川が西流し、旭川市との境界を成している。

納内町で栽培されている農作物は大半が水稻であるが、ソバの栽培は国内2位(町村別)の規模を誇る。



鈴木さんの先代である清治さん(昭和14年生まれ)は昭和28年に就農し、陽志さんには平成11年に農業を引継いだ。陽志さんは約12haの水田を引継いだ。現在、20haまで規模拡大が進んでいる。陽志さんの後継者である省吾さんは平成24年から家業を手伝うようになり、

現在では、陽志さんと二人三脚での農業経営となっている。

この地の品種の変遷をみると、清治さんの時代は、「ユーカラ」→「ミチコガネ」→「トモユタカ」と耐冷性の品種を中心に変遷し、陽志さんの時代には「トモヒカリ」から「きらら397」となり、平成14年には「ほしのゆめ」が導入され、耐冷性に食味が付加された品種へと変遷してきた。現在は、良食味を兼ね備えた「ななつぼし」と「ふっくりんこ」が中心品種となっている。

「きらら397」まで、いもち病の予防防除は実施しなかった。オリゼメートの導入は、「ほしのゆめ」からである。水稻品種のいもち病に対する感受性の変化に加え、温暖化の進展により、いもち病の発生が増加しつつある。

当初オリゼメートは動力噴霧器にナイヤガラホースを付けて、本田散布していたが、中干し作業と散布が重なり、労力分散が必要となり、無人ヘリによる空中散布(委託)を導入した。一層の省力のため、平成25年からは播種同時処理剤(ファーストオリゼ剤)による予防防除を実施している。

今後の農業経営について地元農協と話し合う機会は多い。規模拡大か品質重視か？陽志さんは選択の背景には国の農政に伴う米価動向の行方が大きく影響するという。直播栽培の導入についても、拡大を目指せば、作業分散から導入せざるを得ない栽培方法であるが、移植栽培に比べ減収の可能性は高く、これまた、将来を見極めて進める必要があるという。

鈴木さんには、農業経営の永続を前提として、農業の将来動向を予測・分析し、慎重かつ冷静に営農戦略を構築しようとする真摯な態度があった。

オリゼメートを使い始めて10年余だが、鈴木さん親子には、これからも刻まれるであろうオリゼメートの歴史に大きな期待感をもった次第である。



北海道空知郡奈井江町高島

平成21年道内でいもち病が大発生した
幸い「ななつぼし」には予めオリゼメートを使い
いもち病を未然に防げた



写真は光敏さん

大関さん2世代

光敏さん
(昭和37年生まれ)
貴也さん
(平成元年生まれ)

奈井江町は、北海道の空知地方中部に位置する。石狩平野のやや北部にあり、石狩川左岸に接し、流域には中心市街及び農業・工業地帯がある。東部は空知炭田のある夕張山地にかかり、山岳・森林地帯である。かつて石炭産業で栄えたが、閉山に伴い人口は激減し、農業・工業の振興が図られた。札幌市と旭川市のほぼ中間に位置し、生活環境、生活消費流通、農業の大規模化及び企業立地など恵まれた環境にある。

大関光敏さんは、父である敏夫さんから昭和59年農業を引継いだ。引継いだ時の経営規模は約12haであったが、離農者からの農地買上げと北海道農業公社からの35年間農地貸借による買上制度を活用するなどして、現在は30haまで規模拡大した。光敏さんの長男である貴也さんは平成25年から農業を手伝うようになった。貴也さ



んの専業農家への意思は強く、後継者として大いに期待できる。

現在の経営内容は、水稻22haの他、ビート、秋播き小麦、ブロッコリーを栽培している。水稻は「ゆめぴりか」と「ななつぼし」を等分作付けしている。

直播栽培も導入している。加工米の「大地の星」を3.5ha乾田直播で栽培している。導入間もなく、未だ収量は安定しないという。

光敏さんは現在、『ゆめぴりか生産協力会』の会長を務め、同品種の特栽米振興を図っている。

オリゼメートは平成20年から使い始めた。「ななつぼし」のいもち病防除対策として普及センターの指導により使った。



「ななつぼし」の前の品種は「ほしのゆめ」。「ほしのゆめ」までのいもち病防除は、発生対応型で、基幹は後半の2回防除である。

それまではいもち病の予防防除は行わなかった。平成20年まで、いもち病自体をほとんど見たことがなかったのである。しかるに、平成21年道内でいもち病が大発生した。幸い、「ななつぼし」には予めオリゼメートを使い、いもち病を未然に防げた。オリゼメートを処理する7月上旬には低タンパク化を狙った珪酸肥料の散布が指導されており、互いの作業が徹底されることになった。今では直播にもオリゼメートを使っているという。

平成5年の凶作について聞いた。当時の作付け品種は「きらら397」50%減収の遅延型冷害であったという。とにかく、日照不足で気をもんだことを記憶している。

今後の農業ビジョンについて聞いた。光敏さんは当面の目標規模を50haとしている。個人経営では50haが限界という。また、8条の田植機での移植は20haが最大。

規模拡大には直播栽培の一層の導入が必要になる。水田規格の1ha化が進めば、さらに効率良く作業できるという。

ビジョンを語る光敏さんには、既に具体的なアクションプランがあるのだろう。強い戦略性を感じる、底力のある生産者に会った。

北海道空知郡奈井江町茶志内

息子さんは「とりあえずオリゼメートを使っておいて…」
父曰く「やっぱり安心だよね!」と
親子はオリゼメートに信頼をおいている



加藤さん2世代

勉さん
(昭和34年生まれ)
雅隆さん
(昭和63年生まれ)

加藤勉さんは、地元農協の主宰する『カエル倶楽部』の代表を務める。同倶楽部は主に特別栽培農産物に取組む生産者が集う組織であり、安心・安全な農産物を市場に提供することを目指している。

『カエル』という名称は“自然の生態系をイメージ”してつけた。

勉さんが就農したのは昭和56年。就農当時は水稲8haの他、麦・豆を栽培しており、父で



ある利男さん(昭和6年生まれ)のサポート役を担っていた。現在は水稲約10haに加え、ミニトマトを80mハウス8棟で栽培している。利男さんの頃の水稲品種は「キタヒカリ」、「ミチコガネ」、「トモユタカ」であったが、現在は「ゆめぴりか」が主力で60%の作付け、「なな

つぼし]1.6ha、「ふくりんこ」0.8haとなっている。

オリゼメートは平成21年にいもち病が大発生して使うようになった。平成22年からは地域の普及センターがオリゼメートの指導を始めた。

当初、箱処理剤(Dr.オリゼ箱粒剤)を動力噴霧器にバットホースを付け、緑化期処理していたが、ミニトマトとの作業競合があり、今は地元のオペレーターに頼んで、無人ヘリで散布してもらっている。

雅隆さんは「とりあえずオリゼメートを使っておいて…」 父曰く、「やっぱり安心だよね！」と親子はオリゼメートに信頼をおいている。

「きらら397」は予防しないといもち病が発生する。また、同種は業務用米への用途が主だったが、現在、『ポストきらら397』対策が進んでおり、有望品種に空育180号があるという。新品種への期待が募る。

稲作の難題について聞いた。特別栽培米や有機米への取組みを進めているが、食味確保からタンパク質を下げなければならず、これが収量確保とは相反する。この二律背反の世界を如何に乗り越えられるかが大きな課題であるという。



これからの農業経営について雅隆さんは、水稻、畑作をバランス良く、少しずつ拡大したいという。

新規就農者には150万円の支援金が出るが、新作物、新品種であることが求められる。ハウスを建て、ネギ栽培を始めたいという。栽培方法は土寄せなしのマルチ栽培を導入し、むろん、オリゼメートは定植前に土壌混和する。

前向きで、明るい親子である。オリゼメートの使用歴は5年だが、本剤の安定した効果を熟知しているようだ。雅隆さんの次の世代まで、オリゼメートが貢献できることを願うだけである。

宮城県仙台市泉区実沢

平成の大凶作年オリゼ未使用田の収量は30kg/10a
一方、オリゼ使用田では540kg/10aの収量であった



永澤さん3世代

庄一郎さん
(昭和6年生まれ)
太さん
(昭和30年生まれ)
秀和さん
(昭和59年生まれ)

永澤さんが農業を営む仙台市泉区実沢は仙台市の北西部、泉ヶ岳山系を北に仰ぐ水豊かな農村地帯である。

北東部から南東部の台地は宅地開発が進み、実沢一帯は都市近郊の田園地帯といえる。

都市近郊のため農業の担い手は減少しつつあり、永澤さんのような専業農家が自然と農地を引継ぐこととなる。

現在の管理水田は25ha。

庄一郎さんは昭和20年、先代から農業を引継いだ。太さんは昭和50年頃には農業を手伝うようになり、オリゼメート粒剤は昭和52年～53年頃には地元農協の指導員に薦められ使い始めたという。

昭和45年からは減反政策は始まり、高く売れる高品質米「ササニシキ」の作付けが増加した。

しかし、「ササニシキ」はいもち病に弱く、3～4回散布剤を使っても満足な防除効果は得られなかった。オリゼ



メート粒剤導入後は、出穂期2回程度の体系防除で十分な防除効果が得られた。

平成4年には無人ヘリ専用製剤(オリゼメート粒剤20)が登録となり、オペレーター資格をもつ太さんはオリゼメートを無人ヘリで散布。

平成20年には長男の秀和さんも就農し、無人ヘリオペレーションでは父親である太さんを上回るウデをもつという。

祖父・親子3世代により精力的な農業経営が進行している。

特に印象に残っている思い出は、平成の大凶作と言われる平成5年のことであるという。

オリゼメートを使わなかった圃場では10a当り僅か30kg程度の収穫しかなかったが、オリゼメート使用田からはほぼ平年並みの9俵が収穫できたことである。

農業の将来展望について聞いた。

水稲は50ha位まで拡大したいという。

但し、移植栽培は作業性から現状の規模でほぼ最大か…?

規模拡大には直播栽培の導入が必要であり、しかも、できれば乾田直播がベストであるという。一方、直播には収量の安定性や収穫の作業性及び倒伏しやすい等、課題が多い。

一層の規模拡大には移植・直播を組み合わせることが現実的には必須であるという。

都市化が進む仙台市での農業経営には複雑な課題があるという。

行政の目指す方向は都市化であり、土地開発は台地へと進行する。

くぼ地である水田地帯は開発しにくく、都市化からは取り残され、農業の専門家も少なくなりつつあるため、農業経営は僅かに残る優秀な生産者に益々集約されるだろうという永澤さん3世代の目の奥には「自分達がやらずに誰がやる」という漲る活力が溢れていた。



山形県尾花沢市

尾花沢は県内有数のいもち病常発地
ここで効けば一流の農薬であると言われた



高橋さん2世代

喜久雄さん
(昭和26年生まれ)
寛喜さん
(昭和57年生まれ)

高橋さんが農業を営む山形県尾花沢市は村山地域北東部に位置する。内陸の平地から中山間に至る雪深い地域である。東部は奥羽山脈を背に宮城県と接し、西部は北上する最上川を境として隣町と接している。分水嶺では日本海側でありながら、夏の気候は太平洋からのだし風(やませ)が標高の低くなった奥羽山脈を越え、冷気をもたらし、稲作には厳しい気候である。かつて尾花沢には県の冷害試験地があったほどである。

高橋喜久雄さんは昭和46年、先代から農業を引継ぎ、長男寛喜さんは平成22年から本格的に就農した。現在、高橋さん親子は水稻と切花栽培に加え、仲間3名と減反水田を活用し、計53haのそば栽培も営んでおり、地域では先進的な専業農家である。切花栽培は当初、育苗ハウスの有効活用として着手したが、平成5年の大冷害に伴う、県からの施設補助を活用し、本格的に始めるに至った。

尾花沢は県内でも有数のいもち病常発地で、ここで効くいもち剤は一流であると言われた。高橋さんは昭和55年以前からオリゼメート粒剤を使い始めたという。平成5年の大冷害で尾花沢は遅延型冷害により減収となったが、昭和55年の冷害では、オリゼメート粒剤未使用田



では穂首いもちにより白穂・不稔となり、10aで1俵以下、ほとんど収穫できない状況であった。この時の薬剤の力は忘れられないという。以来、高橋さんは今日までオリゼメートを使い続けている。

本田用のオリゼメート粒剤は平成22年まで使った。6月に水田を見に行けるのはオリゼのお蔭と言っていたが、長男の寛喜さん就農を機に田植機を一新し、今はDr.オリゼ剤を田植同時箱処理により使用している。

今後の展望について規模拡大はせず、家族でできる範囲で維持していきたいという。離農者の水田は借り受けそばを栽培している。直播栽培については中山間の豪雪地帯のため、収量の確保は相当難しい。桃源郷のような静寂な山あいの農村で、しっかり地に足をつけ、家族の固い絆により、直向に農業に取り組んでいる力強い親子をみた…。



岩手県花巻市湯口

いもち病防除を始め、稲作技術はほぼ確立されている
むしろ、後継者を如何に確保・育成するかが重要である



畠山さん2世代

岩さん
(昭和10年生まれ)
英剛さん
(昭和41年生まれ)



畠山さんが農業を営む花巻市は岩手県内陸の中西部、東北の大河である北上川流域に広がる北上盆地を中心とした、水清くして大気清浄な穀倉地帯である。

また、この地は詩人・童話作家として『雨ニモマケズ』や『銀河鉄道の夜』などを著した宮沢賢治の生誕地でもある。

岩さんは昭和28年から先代を引継ぎ、農業に従事した。英剛さんは平成2年より、地元農協に勤務しながら、岩さんと協働して水稻や雑穀類の栽培に専心している。

岩さんに農業の歴史を聞いた。就農当時、手植えであった移植作業は、昭和43年に田植機を導入し、農作業の効率性は大きく飛躍した。

良質米である『ササニシキ』は昭和52年より作付けを始め、地元農協の指導によりオリゼメートを使用するようになった。むしろ、オリゼメートを使わなければ『ササニシキ』は作れなかったという。当初、本田粒剤であるオリゼメートは除草剤同様、手動の散粒機により散布しており、水田に入っただけの作業はかなりの重労働であった。この作業は、圃場整備が進んだ昭和56年からは、動力噴霧器を導入することにより大きく軽減した。現在はオリゼメートの箱処理剤により、さらに省力的な防除を実施している。

平成5年『平成の大凶作』の思い出について、10a当りの収量は『ササニシキ』で1俵、完全なる障害型冷害であった。この時期、英剛さんはライスセンターのオペレーターを務めていた。生産者から収穫物の少なさを痛感したという。

これからの農業について英剛さんは、稲作技術はほぼ確立されている。比較的小規模な家内労働では品質・収量は一定レベル確保できるが、大型化した時、高品質を保てるか？目指す方向は高品質を低コストで実現することだが、高品質ほどコスト高となりやすい。規模拡大の課題は多い。但し、専門化を目指すなら、規模拡大は必須である。しかも、水稻栽培で育苗・移植作業は最も労力を要する。作業分散する必要があり、直播栽培の導入も一考であろうと語る。

幅広い見地からのコメントはさすがに現役の農協職員である。



秋田県由利本荘市矢島町川辺

オリゼメートとの出会いは 昭和50年初頭 近在の指導者に薦められたという 相当なキャリアをもつ



佐々木さん2世代

孝夫さん
（昭和28年生まれ）
巧さん：長男
（昭和54年生まれ）
求さん：三男
（昭和61年生まれ）



由利本荘市矢島町は、秋田県の南部に位置する町。南に秀麗な山容を誇る鳥海山を擁し、鳥海山裾に源流を発する清流、子吉川の流れとともに広がる農村地帯です。矢島町には古くから八朔のお祭りと呼ばれる祭典があり、旧暦の八月朔日にとり行われて

てきた。田穀のよく実るのを祝う式日として、矢島城下の重要行事として現在まで伝えられている。

佐々木孝夫さんは、水稻13haと雌牛10頭による和牛繁殖を複合経営する専業農家である。昭和47年、父である齊さん（昭和7年生）の右腕として就農した。孝夫さんは、その後努力を重ね、家畜人工受精師と家畜受精卵移植師の資格を取得、現



在ではその資格を活かした仕事も請負っている。繁殖の仕事は平成12年に就農した長男である巧さんにしっかり継承されている。

孝夫さんが就農した当時のイネ品種は「キヨニシキ」。数種の変遷を経て、昭和60年より主力の「あきたこまち」の作付けを始めた。作付け初年度は挫折型倒伏となり、栽培管理に苦労したようだ。現在は「あきたこまち」、「ひとめぼれ」、「ササニシキ」に加え「コシヒカリ」も栽培している。水稻は直売主体に販売し、消費者ニーズに対応した品種構成になっている。精白米は『久次郎米』として独自ブランドで供給している。



孝夫さんにとって水稻栽培の最大の目標は「おいしい米」作りにある。既に、“おいしい米づくり日本一大会”で優良賞を、“あなたが選ぶ日本一おいしいお米コンテスト”で金賞を受賞するなど、実績は輝かしい。

オリゼメートとの出会いは、昭和50年初頭。近在の指導者に薦められたという。相当なキャリアをもつ。昭和60年からはペースト肥料に加用して移植同時側条処理する側条オリゼメート顆粒水和剤を導入している。さらに、平成24年からは、箱処理できる田植機を導入し、Dr.オリゼフェルテラ粒剤を移植同時処理しているという、オリゼメートの愛用者である。

今後の農業経営に対するビジョンを聞いた。規模拡大には継続して取組むが、管理できる一定のレベルまでである。最大のポイントは、独自のブランド米を確立することにあるという。“おいしい米”、“安心、安全な米”を消費者に届けることが最大の目的と心得ているという。

この親子は、とにかく元気がよく、パワフルである。中山間地域にも、逞しい魂が息づいている。日本の農業の行く末は明るい…。

秋田県大仙市太田町中里

イネが赤くなっており 近所の先輩に見てもらったら
「これはいもち病だ!オリゼメイトは使わなかったのか」と聞かれた



田村さん2世代

健郎さん
(昭和32年生まれ)
辰徳さん
(昭和58年生まれ)



大仙市太田町は、秋田県のほぼ中央部に位置している。町の東部は奥羽山脈による山岳地帯になっており、北東部は白岩岳を挟んで角館町と隣接している。町の西側は田地として利用される平坦地で、北端には町の境界となっている斉内川を始め、窪堰川や川口川が、東から西へと流れており、水豊かな田園地帯である。



この太田町は「となりのトトロ」を描いた男鹿先生の故郷。太田の田園風景を描いた絵を使ってトトロの絵コンテを描いたそうだ。

田村健郎さんは、水稻12haに加え、キウの施設栽培にも取り組む専業農家である。

昭和55年に父である三郎さんのサポート

役として、就農した。当時の水稲品種は「レイメイ」の時代が終焉し、「キヨニシキ」、「トヨニシキ」の最盛期。いもち病には強い品種で、同病の発生を見たことがなかったという。昭和60年からは「あきたこまち」の作付けが始まり、ある年、みぞ切をしていたら下葉が赤くなっていることに気が付いた。いもち病を見たことがなく、近所の先輩に見てもらったら、「これはいもち病だ！オリゼメートは使わなかったのか」と聞かれた。これがオリゼメートとの出会いである。翌年から本田でオリゼメート粒剤を使い始めた。6月中旬になるとセスナ機が飛んで来て、「農家の皆さんオリゼメートの散布適期です。オリゼメートを撒きましょう！」と航空宣伝されていたのは知っていたが、「あきたこまち」作付け前にオリゼメートは使わなかったという。

平成15年からはペースト肥料に側条オリゼメート顆粒水和剤を混和し、移植と同時に側条施用するようになり、現在に至っている。

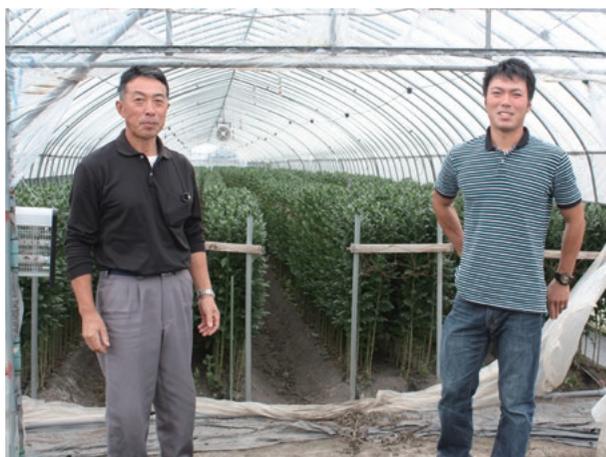
水稲は移植前の予防防除を徹底し、移植後は安心してキクの栽培に専念できる。キク栽培への取組みは10年前から。それまで、ほうれん草を栽培していたが、土地改良し葉菜類の栽培は困難と判断。以前から夢見ていたキク栽培に着手し、現在は後継者の辰徳さん(平成15年に就農)がキク栽培を担当している。また、キクのハウスは春先、地元農協から委託を受けてイネ苗を栽培しており、有効に活用している。

「大凶作」だった平成5年の話を聞いた。田村さんの水田地帯は平坦部でやや減収程度ですが、太平洋から奥羽山脈を越えて“だし風(やませ)”が入ってくる太田町の山手は収穫皆無であった。この“だし風”の川上から川下にかけていもち病が発生した。平坦部でも登熟が著しく遅れ、稲刈りは11月までかかり、たいへん苦労したという。

ひとたび天候に異変が起こると、自然相手の農業には大小様々な影響が出る。

田村さん親子は、創意工夫をこらし専業農家として粘り強く生きている。

そこには、東北人の質実剛健な伝統が受継がれていた。



福島県耶麻郡西会津町

西会津町は県下有数のいもち病多発地帯である
オリゼメートがなければコシヒカリは作れなかった



伊藤さん2世代

五郎さん
(昭和9年生まれ)
健一さん
(昭和32年生まれ)



伊藤さんが農業を営む耶麻郡西会津町は福島県会津地方の西部、新潟県に隣接する県境の町である。北方には飯豊連山を擁し、新潟湾に注ぐ阿賀川の上流域を成す中山間地帯である。水田は国道と阿賀川沿いに広がり、山が迫る入り組んだ地形から、県内でも有数のいもち病多発地帯になっている。

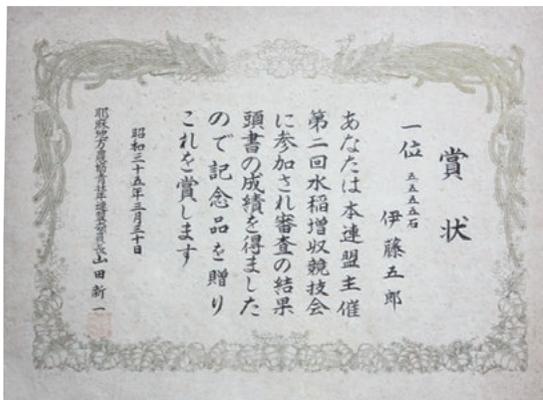
五郎さんは昭和23年、14歳の頃から後継者として、先代の農業を手伝うようになった。この頃は食糧増産時代で小学校の校庭でも、まめ、いもなどを栽培していた。教科書はなく新聞を教材として使うなど厳しい時代であった。

就農当時は水田1.2haであったが、現在は10ha以上の水田で稲作を営む専業農家である。

研究熱心な五郎さんは多収技術の確立に専念し、昭和34年には、水稻多収で県下一番とな

り、県から表彰状を受賞した。県庁の授賞式会場では「どのようにして中山間地域で多収できたのか？」との質問・疑問が相次いだという。

これらの功績と長い間の意欲的な営農活動が評価され、後に、西会津町農業委員会の会長に就任している。



オリゼメートは昭和54年から、現在に至るまで使用している。オリゼメート導入前は粉剤を5～6回散布したが、いもち病が多発すると減収となった。オリゼメートを使うようになって、いもち病で減収することはなく、町全体でもかなりの生産者がオリゼメートを使うようになった。地域の主力品種である「コシヒカリ」は特に穂首いもちに弱く、葉いもちをしっかりと防除する必要があり、オリゼメートは欠かすことができない予防剤である。

平成10年からは箱処理剤に切替え、移植の一週間前に施薬している。さらに、平成26年からは、より省力的な播種同時処理剤の導入を予定している。

繁忙期には勤め人の健一さんに手伝ってもらい、親子二人三脚で急場を凌いでいる。

規模拡大には慎重である。雑草防除や用水管理に手が届かなくなり、農業環境が荒れてくる懸念があるからだ。

中山間地の農業環境は厳しい。平場が少なく、水田規格には限界があり、複雑な地形から山影、河川域の水田では、いもち病が多発する。一方、気温の日較差(約10℃)があるため、夜は稲がしっかり休み、美味しい米ができるという。

この地にしっかり根を生やし、この地の土、水、大気等々と66年間付き合ってきた五郎さんに、どっしりとした大木の存在感を覚えた限りである。



「赤べこ」は会津地域の郷土玩具

福島県河沼郡会津坂下町船形

品種の変遷は何回かあったが、
オリゼメートの効果は一貫して安定していた



佐藤さん2世代

繁さん
(昭和7年生まれ)
栄一さん
(昭和29年生まれ)

佐藤さんが農業を営む福島県会津坂下町は会津盆地の西部に位置し、町の中部から東側は盆地が広がり比較的平坦部で、水田が多い。一方、町の西側は山林が多く、佐藤さん在住の船形は山林地帯が始まろうとする地帯にある。

佐藤さんは、会津農業研修所を卒業後、昭和22年、先代を手伝い、農業に従事した。一方、長男の栄一さんは、会社に勤務する傍ら、農繁期には父親を手伝い、家業をフォローしている。

現在、佐藤さんは水稻の他、りんご、かき等の果樹類も栽培している。会津地方は日本海側の気象を呈し、冬期は降雪のある厳しい気候だが、農作物の生長する春期から初秋は天候に恵まれる穀倉地帯である。加えて、佐藤さんの農地の土質は粘土質で、硬度が深いため、水持ちが良く、美味しい米の源泉であるという。

オリゼメートとの出会いについて尋ねた。昭和57年から使い始めた。それまでは粉剤を2～3回使っていたが、効果は満足できるものではなかった。オリゼメートを中干し前に動力噴霧器で畦畔から散布することにより、安定した予防効果が得られた。当時、オリゼメートを散

布するタイミングは、メーカーが空中宣伝のために飛ばしたセスナ機からの「農家の皆さん、オリゼメートを撒きましょう」であったと述懐した。

平成11年からは箱処理剤に切り替えた。当初、移植直前に畦畔で散布したが、その後、移植前に育苗ハウス内での散布にした。現在はハウス内で動力噴霧器にパットホースをつけ効率的な散布をしている。

繁さんは60年以上の長きに渡り、水稻栽培を経験しており、その間の水稻品種の変遷を聞いた。就農の頃は「農林21号」。この品種は昭和20～30年代における北陸地方の主力品種である。食味は良いが、いもち病に弱かったと繁さんの言。その後、「ササシグレ」、「藤坂5号」、「初星」、「トヨニシキ」、「キヨニシキ」と変遷し、昭和50年代には「ササニシキ」が登場し、所謂、銘柄米の時代が到来した。

昭和50年代後半には「コシヒカリ」の導入が進み、現在に至っている。まさに、戦後日本の水稻品種変遷史を聞いた次第である。

品種の変遷はあったが、オリゼメートの効果は一貫して安定していたという。

今、米作りで困っていることを尋ねると、「高齢だから、肥料でも農薬でも便利で省力なものが良い」という。そろそろ栄一さんに引継ぐ時が来たのか？長い間、家業を支えてきた繁さんに「たいへんご苦労様」とエールを送った。



新潟県上越市池

オリゼメートは昭和50年代初頭から使い始め 今日までオリゼメートの全生涯と共に歩んでいる



写真は勇二さん

坪井さん2世代

稔さん

(昭和13年生まれ)

勇二さん

(昭和40年生まれ)



上越市は、新潟県南西部に位置する都市である。1971年、日本海沿岸部の直江津市と内陸の高田市が合併し旧上越市となり、2005年、周辺13市町村が合併し、現在の上越市となった。ほぼ全域が特別豪雪地帯に指定され、冬期の気象は厳しい反面、夏期は天候に恵まれ、豊かな穀倉地帯になっている。

坪井さんの住む池地区は日本海から約10km南下した高田平野のほぼ中心に位置しており、一帯はほぼ平坦部で、農業には恵まれた環境にある。

坪井稔さんは日本に農業高校ができた頃の初代卒業生かもしれないと勇二さん。稔さんが就農したのは昭和30年。当時の主力品種は「ホウネンワセ」、「越路早生」などだが、昭和31年からは「コシヒカリ」の作付けが始まっている。勇二さんの就農は昭和60年だが、途中、東京での就労が6年間ほどある。後にこの経験が米の消費地体験となって現在の営農活動に活かされてくる。

勇二さんは稔さんの思い出として、冷夏になると「コシヒカリ」にはいもち病が大発生し、父親は常に動力噴霧器をかついで薬剤散布をしている姿が記憶にあるという。そんな苦労がオリゼメートの導入により解消された。昭和50年代初頭からオリゼメートを使い始め、今日まで、オリゼメートの歴史と共に歩んでいる。

離農した農地を取得するなどして、勇二さんに代替わりした現在の経営規模は36ha。「コシヒカリ」の作付けは約50%。オリゼメートは箱処理剤であるDr.オリゼの移植時処理を経て、今は播種同時処理剤のファーストオリゼを導入している。

勇二さんの経営の特長は、自らもつ米の検査技師の資格を活かし、収穫した水稻のほぼ半量を直売していることである。東京での6年間で消費者心理を掴んだのかもしれない。消費者との直接のコミュニケーションルートは稲作経営の強みともいえる。平成5年の大凶作の時は消費者から直接の注文が殺到したという。苦しい時に対応したことで、強い絆ができたとも言えるだろう。

困り事を聞いた。カメムシ類の発生はこの地域でも落等の原因になっており、生産者には悩みの種となっているが、勇二さんは初期発生がなければ防除しないという。地元農協の発信する営農情報をみて、無人へり防除を申込む。これまでに大きな被害はない。

むしろ、水田雑草の防除に苦労している。以前は初期一発で済んでいたが、今は複数回防除しても取りこぼしがあり、草が強くなっているのかもしれないという。

これからのことを聞いた。後継者候補は3人いる。ご子息3人である。長男はデザイナー。次男は料理人。そして三男はエンジニア。長男はコメの包装のデザインをし、次男は自給農産物で料理を創作し、三男は農業機械のメンテナンスをする。そんな構想を語る勇二さんに農業の底力を感じずにはられない。



長野県安曇野市穂高有明

直播栽培、WCS（発酵粗飼料用稲）には
本田で7月中旬にオリゼメートを施用している



写真左から 会田一生さん、前 代表理事、会田明太郎さん

農事組合法人
富田生産組合

代表理事 会田明太郎さん
（昭和18年生まれ）
会田一生さん
（昭和24年生まれ）

安曇野市は、平成17年に5町村が合併して誕生した。長野県のほぼ中央部に位置し、北は大町市、松川村、池田町、生坂村、筑北村、南は松本市に隣接している。西部は雄大な北アルプス連峰がそびえ立つ中部山岳国立公園の山岳地帯であり、燕岳、大天井岳、常念岳などの海拔3,000m級の象徴的な山々がある。北アルプスを源とする中房川、烏川、梓川、高瀬川などが犀川に合流する東部は、「安曇野」と呼ばれる海拔500から700mの概ね平坦な複合扇状地となっている。穂高町は安曇野市北西部にあり、清流を利用してワサビ栽培が行われるなど、水

清く、大気清浄なる高原の町である。



会田明太郎さんは富田生産組合の代表理事を務める。55歳で勤めを退職し、60歳で就農するという経歴の持ち主である。右腕の会田一生さん（明太郎さんとは無縁）は昭和40年から勤務のかたわ

ら、先代の一寿さんを手伝い始めた。完全に引継いだのはこの10年余である。組合の会員は19名いるが、常時従事者は明太郎さんと一生さんである。60名から農作業を委託されており、多忙期には最大20名位の組合員に手伝ってもらっている。

経営規模は水田50ha(移植:42ha、直播:8ha)の他に大麦・WCSの輪作を11ha(6/20移植)営んでいる。今後、WCSの作付けを増やしていくという。栽培品種は「コシヒカリ」、「美山錦」(酒米)、「モチヒカリ」であり、直播とWCSは全て「コシヒカリ」である。

明太郎さんの記憶は組合に入った10年前からしかなく、また、一生さんの記憶も曖昧で、オリゼメートの導入時期が不明であったが、前代表理事が偶然訪れ、1980年代から使っていることが明らかになった。直播、WCSには本田で7月中旬にオリゼメートを施用している。

今後のビジョンについて、国の農政にはついていかなければならない。これを前提に、水稻だけに頼らず、直売も視野に入れるとともに6次産業化を推進する。即ち、水稻、麦、大豆からの脱却が求められており、野菜類の栽培を導入し、直売所の経営にもチャレンジしたいという。栽培したそばも直売所で食べてもらう構想である。

作業受託をさらに進めるには、今の委託料は高すぎる。市の協定価格である委託料をもう少し下げる必要があるという意見。この組合に頼めば、土地を守ってくれるという意識付けをしたい。

安積野の水、山、大気。この恵まれた農業環境の中で、そして、この土地で永続的に農業に取り組むことに、強い使命感を持っている二人の会田さんには、不動の意志と働く喜びが漲っていた。



栃木県大田原市小滝

箱処理剤を導入してからはいもち病の発生は
一層少なくなり 効果はより安定してきた



植木さん2世代

初男さん
(昭和24年生まれ)
俊行さん
(昭和47年生まれ)

写真は初男さん



栃木県大田原市は、県北東部に位置し、東端は八溝山地により茨城県、福島県と県境を接し、中央から西部は那須野原扇状地の扇端付近に当たる平地が広がり、豊かな穀倉地帯を成している。

鮎漁の盛んな清流として知られる那珂川が市の中央を流れ、八溝山系の里山など豊かな自然が息づいている地域でもある。

植木初男さんは、昭和42年、専業農家であった先代の初太郎さんの片腕として就農した。先代の時代には農耕馬がいたことを記憶しているという。初男さんが就農時には、耕耘機を使用していた。

就農当時、水稻品種として既に、「コシヒカリ」を栽培していたが、主力は「フジミノリ」、「レイメイ」。その後、早生多収品種として「トヨニシキ」を導入し、「日本晴」、「初星」の作付けにも取組んだ。

いもち病で思い出す品種は昭和40年代に作付けした「クサブエ」である。いもち病抵抗性品種として導入したが、作付け数年後に罹病化した。これは「抵抗性の転落」の歴史的事実であろう。

現在の水稻作付けは約7ha、「コシヒカリ」を50%栽培し、50%は「あきだわら」という晩生の短稈多けつ型の多収性品種(主に業務用)を作付けしている。作業とリスクの分散も考慮し、2品種を導入している。

オリゼーととの出会いは昭和55年頃。いもち病の発生しやすい圃場を中心に本田でオリゼーメイト粒剤を処理した。平成10年からは箱処理剤(Dr.オリゼープリンス粒剤)へ切替えた。本田剤の時は処理するタイミングに苦労したが、箱処理剤を導入してからは、いもち病の発生は一層少なくなり、効果はより安定してきた。

平成5年の「大凶作」のことを聞いた。大田原市は遅延型冷害で平均収量は2～3俵。よくて5俵であった。いもち病の発生状況については、とにかく穂は空っぽで病気どころではなかった。気になることは、米不足と報道されたが、倉庫にコメは残っていたという…。



後継者として期待している長男の俊行さんは、今は勤めのかたわら、農繁期などに手伝ってもらっているが、10年位したら本格的に就農してくれるかもしれないと遠慮がちに語る初男さんの言葉には、直向きな農業者の熱い思いが込められていた。

千葉県山武郡横芝光町

種苗会社は生産者に発言力が強いが 『オリゼメートを使って明らかに効果がある』という



山崎さん2世代

文武さん
(昭和15年生まれ)

義則さん
(昭和39年生まれ)

横芝光町は、千葉県北東部太平洋側の町。九十九里平野のほぼ中央に位置し、町の北部は標高の高い場所もあるが、起伏は小さく、ほぼ真中を九十九里平野最大の河川である栗山川が流れている。年間を通して、比較的温暖であるとともに、首都近郊から大消費地への生鮮野菜等の供給基地を担うなど、農業には恵まれた地域である。



山崎義則さんは水稲10ha(作業受託含め計20ha)、ネギ1ha以上を周年栽培するとともに、地元農協から委託されネギ苗約12ha分を栽培する専門農家である。昭和61年に就農し、平成15年、父親の文武さんが公務重責を担う立場となり、実質農業を引継いだ。

ネギは盛夏の7～8月を除き、周年で播種・収穫している。収穫時期に合わせて播種をするというスケジュールである。

オリゼメートを使い始めたきっかけは、地域の普及センターと農協からの指導による。ネギへの適用拡大が平成9年7月であることから、オリゼメートの使用はそれ以降となる。使い方は、定植の1.5か月後、第一回目の土寄せ時に処理している。

ネギは生育が低調になると軟腐病にかかりやすくなるため、まずは栽培管理を徹底することに留意するとともに、オリゼメートを効果的に使うことが防除のポイントである。

種苗会社は生産者に発言力が強いが、『オリゼメートを使って明らかに効果がある』という。

ネギの病害虫で現在、最も困っている病害は黒腐菌核病である。土壌消毒が指導されており、今年初めて処理したが、頻繁には使いたくない。かつて、湛水化による耕種的防除にチャレンジするも、残念ながら減水してしまった。また、輪作するには、農地に余裕がない。当面、発生状況を見ながら、必要最小限の土壌処理剤を使うことになる。



また、べと病対策にも注力している。施設での育苗時には、温度管理に留意している。地域の発生情報があれば、即、治療効果のある薬剤を散布する。

今後の経営について聞いた。ネギ栽培が主力だが、拡大は50a程度か。パートさんを効率的に使い、後継者を如何に育成するかが、大きな課題であろう。良いネギを作るより、如何にして普通のネギを作るかが目標であるという義則さんには、緻密に組み立てる企業的な農業経営のマインドが潜んでいる。心に秘めたる後継者への思いが実現することを期待したい。

茨城県坂東市生子

作柄が良い時はみんな良いが
悪い時（マイナス要因がでた時）にはマイナスを除く
オリゼメートはその一翼を担ってくれた



木村さん2世代

暁さん
（昭和37年生まれ）
匡史さん
（昭和63年生まれ）

坂東市は、茨城県南西部、利根川北岸に位置する。首都圏内で消費するレタス・ハクサイ等の農業（近郊農業）が盛んである。平成17年、岩井市と猿島町が合併し現在の坂東市となった。市名の由来は利根川の愛称“坂東太郎”からきており、利根川に育まれた豊かな自然を象徴している。洪積台地であることから田畑の間に林野が多く残されているなど、開墾以来の面影をそのまま残す地域も存在する。

木村暁さんは平成3年に就農した。大消費地への生鮮野菜の供給基地ともいえる地域特性を活かして、畑作野菜を主力に農業を展開している専業農家である。春はハクサイを中心に栽培し、秋はレタス中心の作付け体系であり、規模は各2～3haとなっている。無論、水稻も栽培している。

暁さんの後継者である匡史さんは平成20年就農し、今は親子二人三脚の毎日である。

暁さんは、主に祖父から栽培技術を学んだ。受継いだやり方を踏襲していたが、例えば、レタスでは収穫期になると痛んでくることが続いた。祖父のやり方を変えることは難しかった。肥料も例年通りの量を売りに来る。何年かに一回は良かったが、安定しない。何とかして改善

したい、先代を超える技術を発掘したいと考えた。見識ある人のアドバイスから肥培管理の改善等を進めるなど、諸々努力し続けていたら、いつの間にか良くなってきた。

オリゼメートとの出会いは平成10年である。ハクサイ、レタスともある程度までは作れたが、さらに上を目指したかった。量も質もワンランク上を目指したいと強く意識した。病気の発生は栽培者みんなに被害をもたらすが、これを防げば、さらにランクアップする。作柄が良い時はみんな良いが、悪い時(マイナス要因がでた時)にはマイナスを除く。オリゼメートはその一翼を担ってくれた。

オリゼメートの処理にはトラクターに設置したミキシングソーラーを使っている。肥料とオリゼメートを混ぜながら圃場に全面処理している。形状の異なる数種の肥料との混和実験から、均一に混ぜる方法を考えた(右写真参照)。



レタスの育苗方法も変えた。従来の育苗ではレタスに限って生育不良が頻発したが、セルトレイ育苗で改善された。

匡史さんは、機械の操作は任せてもらっているが、栽培に関しては、指示には従うものの、自分でトータルの管理はできないという。

暁さん曰く、量より質の栽培管理である。この言葉に匡史さんに引継ぐ全てが込められていた。

オリゼメートの導入は平成10年からであるが、園芸分野でも世代を超えて20年、30年と受継がれることを期待してやまない。

山梨県北杜市白州町

こんな標高の高い所では
オリゼメートがなければ「コシヒカリ」は栽培できない

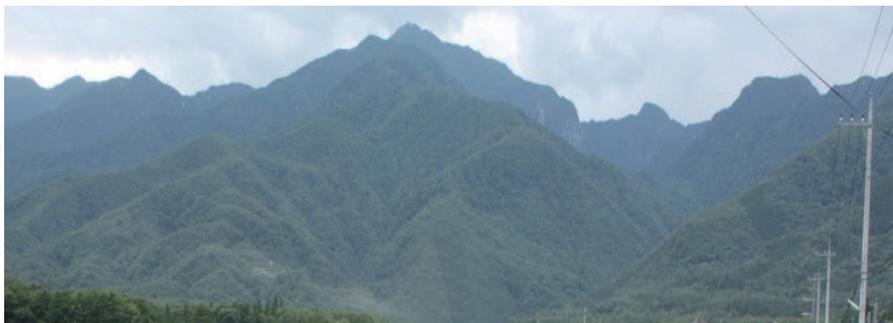


古屋さん2世代

常雄さん
(昭和10年生まれ)
一仁さん
(昭和46年生まれ)

北杜市は、山梨県の北西部に位置する市で、白州町はその西端に位置し、長野県と県境を接する高原の町である。町名は、河川の流れにより、花崗岩でできた山肌が削られ、運ばれて形作られた白砂の扇状地に由来する。釜無川の渓谷を挟んで、北方は八ヶ岳連峰の裾野に接し、南方には南アルプスの名峰甲斐駒ヶ岳が屹立している。高山を源とする豊かな清水に恵まれ、甲斐駒ヶ岳源流の尾白川の水は「日本名水百選」にも選ばれている。

古屋常雄さんは昭和30年、先代から農業を引継いだ。当時の水稻品種は「農林17号」、「藤坂5号」、「農林24号」など耐冷性品種が主力。その後、「農林48号」を経て、一時期「トヨニシキ」、「ひとめぼれ」を導入したが、この20年間は「コシヒカリ」が主力品種である。一方、昭和55年頃



古屋さん宅から見た甲斐駒ヶ岳(中央奥)

より畜産(肉用牛)にも着手。ホルスタインから現在は性格のおとなしい黒毛和牛を飼育している。黒毛和牛を導入した平成10年からは専業農家として本格的な複合経営を進めている。また、この平成10年は一仁さんが地元役所に勤める傍ら、本格的にサポートを始めるようになった時期である。現在、水稻の作付面積は約8ha。全て特別栽培米として出荷している。オリゼメートの導入は平成5年より、無人ヘリでの散布で始まった。その後、箱処理剤へとシフトし、現在に至っている。箱処理剤は全て奥様の手撒き。8ha分はたいへんだが、心をこめて散布される農薬は本望であろう。

水田は標高600～900mにあり、こんな標高の高い所では、オリゼメートがなければ「コシヒカリ」は栽培できないという。

ちょうど、オリゼメートを導入した平成5年は、「大凶作」の年。当時の作柄について聞いたところ、若干減収した程度であった。山梨県は四方高山に囲まれ、恵まれていたという。特に、北杜市の作柄は安定している。

地元農協の指導(特Aのための5原則)もあり、水田の肥培管理や水管理等、栽培全般に注力しているが、一番の困り者は雑草。特に「ホタルイ」、「コナギ」には手を焼いているという。



古屋さんの家の前からは、勇壮な甲斐駒ヶ岳が眼前に迫る。この類稀な大自然に抱かれて、古屋さん親子は『清らかな水と清浄な大気と気温の日較差』はおいしい米の源泉であることに確信をもっているようであった。

群馬県吾妻郡高山村大字中山

昭和55、56年いもち病が多発し、
効果的な薬剤を探していたところオリゼメートの情報を得て、
以来、現在まで使っている。



尾見さん2世代

豊さん
(昭和11年生まれ)
武尚さん
(昭和37年生まれ)

写真は豊さん

高山村は群馬県の北西部、吾妻郡の東端に位置し、四方を緑豊かな山々にいだかれた高原の山村である。村の標高は低い所でも420mあり、最も高い所では1,250mを超える。また、村の中央を西方へ名久田川が流れている。夜空の美しさが光環境条例で守られており、村内には県立ぐんま天文台がある。

尾見豊さんは、昭和30年に就農した。高校時代から稲の研究に取り組み、「保温折衷苗代に関する研究」で県内発表をしているほど、研究熱心な生産者である。就農後、父である力松さんを手伝い6年が経過したところで、地元農協に入組した。平成に入り、先代から農業を引継ぎ、農協勤務を全うし、現在に至っている。長男の武尚さんは農繁期には頼りになる助っ人である。

イネ品種の変遷を聞いた。就農時には短稈多けつ多収型の「農林24号」を作付けしていた。その後、「トヨニシキ」、「初星」等の品種を経て、現在は「ひとめぼれ」、「コシヒカリ」が地域の主力品種である。かつて、標高470mでは「コシヒカリ」の栽培は難しかったが、温暖化が進んだのか？今は村内の水田30%に「コシヒカリ」が作付けされている。



オリゼメートとの出会いは昭和57年頃。昭和55、56年いもち病が多発し、効果的な薬剤を探していたところ、オリゼメートの情報を得て、以来、現在まで使っている。当初は7月上旬本田でオリゼメート粒剤を水面施用していたが、現在は箱処理剤(Dr.オリゼプリンス粒剤6)を移植前に処理している。

平成5年のことを聞いた。高山村は標高470m以上。障害型冷害となり収量は10a当たり1～2俵で、大半がくず米という厳しい状況であった。最近は、種子消毒(化学農薬2種混：共同防除)、いもち病・害虫防除、雑草防除及び後半のカメムシ・いもち病防除で仕上げ、作柄は安定しているという。また、村内には有機・無農薬、減農薬に取り組む人はいるが、特別栽培米としての出荷はない。付加価値をオンコストできないからである。

山々にいだかれた高原の村では静かに時が流れていく。何も足さない、何も引かない素朴な農業が、世代を超えて営まれている。さらさらと水はけの良い土は米にうまみをもたらすと語る尾見さんは、大切なものは何かを知っているようであった。

富山県砺波市増山

かつて、いもち病の防除はしなかったが、収穫すると首が折れていた
昭和63年よりオリゼメートを使い、救われた



宮野さん2世代

健一さん
(昭和27年生まれ)
幸一さん
(昭和51年生まれ)



宮野さんが農業を営む砺波市は富山県西部の市である。富山平野南西部の砺波平野は農家が田園に点々と散在する散居村の風景が美しく、また、チューリップ球根の産地でもある。宮野さんの水田は平野が見渡せる、小高い丘上にある。

農業用水は「芹谷の用水」として上流から引いてきている。

戦国時代、付近は増山城の城下町であり、寺町として寺社仏閣が集まっていたという。

健一さんは昭和61年から先代を引継ぎ、農業に従事した。平成6年からは、幸一さんが就農し、宮野家の戦略は大きく飛躍した。現在、耕地は40ha、水稻34ha、そば6haなどを栽培する専業農家である。

かつて砺波平野では、いもち病が大発生すると、収量は10a当り1俵と大減収することがあった。

また、いもち病防除をしなかった時など、収穫すると首が折れていることがあったという。地元農協や近在の中核農家から薦められ、オリゼメートは昭和63年から使い始めた。

オリゼメート導入以来、収量は安定したという。

本田剤から始まり、箱処理剤は殺虫剤の見直しを進め、現在3世代目(ファーストオリゼフェルテラ剤)を播種同時処理で使っている。

水稻栽培は34haだが、移植栽培は21ha、残り13haは湛水直播栽培を鉄コーティング糶による8条点播で導入している。直播栽培ではオリゼメートを本田施用しているが、移植栽培の箱処理に匹敵する省力防除法を直播栽培でも開発願いたいとする強い希望が出された。

平成5年の思い出を聞いた。減収の最大の原因は遅延型冷害であったという。

今後、農業は一層の競争力強化が求められるようになる。厳しい状況下でも高品質を維持し、ユーザーのニーズに対応できるように努力したいという宮野さん親子にはプロとしての強い決意が込められていた。



富山県(福光町)には江戸時代の加賀藩の時代から稲の病害虫を払う「熱送り」の民俗伝統行事がある。現在でも「ねつおくり七夕祭り」として土用の三番の日に続けられている。

イネいもち病は古くは「稲熱病」と書かれた。これは、イネがいもち病にかかると熱をもったように真っ赤になることを例えた呼び方である。富山県の「熱送り」行事はいもち病にかかって「熱」をもたないよう「払う」行事なのであろう。江戸時代から、いもち病は稲作にとって恐れられていた病気なのである。

広島県庄原市

オリゼメートは「コシヒカリ」のいもち病対策に、 「新千本」の白葉枯病対策に使うことを先代から引継いだ



藤谷さん2世代

啓二さん
(昭和29年生まれ)
春樹さん
(昭和62年生まれ)



藤谷さんが農業を営む広島県庄原市は県北東部に位置する県下最大面積の市である。中国山地の山懐にあり、東に岡山県、北に鳥取県、島根県と境を接する県境のまちである。県境周辺は1,200m級の高峰と森林に囲まれ、全市の85%余りを山林が占め、農地は約6,000ha。内、水田が約5,000haと大半を占める。

啓二さんは地元農協に勤めながら、平成4年先代から農業を引継いだ。春樹さんも地元農協に勤務の傍ら、平成20年から啓二さんを手伝い、現在は親子二人三脚で農業を営んでいる。

オリゼメートは、啓二さんが就農した時には既に「コシヒカリ」中心に使用しており、また、「新千本」にも白葉枯病対策として使用していた。中山間地域の入り組んだ地形からいもち病の多発地帯であり、記憶は不鮮明だが、先代は昭和50年代からオリゼメートを使用していたと

いう。藤谷さんは3世代に渡りオリゼメートを使用し続けていることになる。現在は育苗箱処理剤(Dr.オリゼプリンス)を使い、ここ数年来いもち病はほとんど発生せず、安定した効果が確保されているという。

口数の少ない啓二さんに「農業の厳しい思い出」について尋ねると、平成5年の「大凶作」より、むしろ、平成6年の高温・水不足の記憶が鮮明に残っているようで、多発した胴割米の被害を回想していた。

また、最近の課題としては、「カメムシ」対策を指摘した。広島県では30年前から発生しているというが、斑点米による落等が散見される。



今後の課題等について、春樹さん共々伺った。

中山間地域の農業には、水管理や圃場の集約化等において平場にはない苦勞が様々ある。また、諸経費は漸増傾向にある一方、米価の推移には厳しい状況が予測される。

この地でも農地の集約化が進みつつある。耕作放棄地の拡大や高齢化による作業不可等に対応して請負栽培等が進展している。一方、病害虫防除はここ2～3年で個人による地上防除から無人ヘリコプターで散布してもらうケースがでてきた。また、機械を共同使用するケースもある。

経営規模に限界がある中山間地では、様々な創意工夫の中、農業が連綿と存続している。

藤谷さん親子は共に地元農協に勤務しながら、徐々に栽培技術等を継承しつつ、静かだが、しっかり地に足をつけて日本の農業の一翼を担っているのである。

岡山県高梁市有漢町

いもち病、白葉枯病によく効いており、
問題が発生したことはほとんどなく、非常に安定している



佐倉さん2世代

敏男さん
(昭和21年生まれ)
康之さん
(昭和47年生まれ)

右端 佐倉康之さんの同僚

佐倉さんが農業を営む岡山県高梁市は、中国山地の豊かな自然に恵まれた地域である。岡山県中西部に位置し、市域の大半が吉備高原上の丘陵地からなる中山間地域である。高梁川が北から南に貫流し、中心市街地は高梁川と成羽川が合流する地点の北側に広がる盆地に位置し、城下町の古い町並みを残している。



当地域では、稲のほか、もも、ぶどうなどが栽培されている。

康之さんは、平成6年から就農。父敏男さんと協業して農業経営に従事した。その当時、敏男さんは既にオリゼメート粒剤を使用していた。

農協の指導もあり、現在でも継続してオリゼメートを使い続けており、生産者として効果に信頼感を持っていたことは言うまでもない。

オリゼメートとの出会いは、本田粒剤(オリゼメート粒剤)から。

その後、箱処理剤(Dr.オリゼプリンス粒剤10)に移行した。箱剤の普及により、本田に入る回数が減り、省力化が大きく進んだことが印象深い。

地域の農協に就職してからは、水稻や果樹・野菜場面で、生産者への対応を行ってきたが、特に水稻に関しては、米価低迷の状況も考慮して低コストで十分な効果の箱剤としてDr.オリゼスタークル箱粒剤を採用し、指導している。

一方、農協育苗センター(苗箱12万枚を育苗)向けには、播種時処理できるオリゼ剤を採用し、現在でも継続している。

箱剤は耐性菌リスクがあり、実際に耐性菌問題で使用できなくなった薬剤もあるが、オリゼメート剤はこの点でも問題なく、長い実績があり、効果も安定しているので全面的に採用している。

ただ、箱剤の殺虫成分によっては、出穂期の本田散布までの期間に残効切れとなる害虫もあることから、本田防除指導における一つのポイントとして、害虫の発生には常に気を付けているという。農協マンとしての強い指導性が感じられた。

オリゼメートの散布方法は、本田粒剤の時代には、田んぼに入って手撒きで散布していた。現在、農協育苗センターでは播種時施肥機を導入して機械散布しており、地域の3分の1程度の苗を作っている。また、オリゼメートは大半が箱剤になっている。

オリゼメートは、いもち病、白葉枯病に良く効いており、問題が発生したことはほとんどなく、非常に安定していると思う。

平成5年は農協入会数年後で、一部でずり込みも見られたと記憶している。オリゼメートは良く効いたと感じているが、本田での手散布が多かったことから散布ムラがあったり、水管理の問題などにより部分的にずり込みが発生した可能性はある。箱剤が普及してからはずり込み症状が確認されたことはなく、一層効果が安定したと感じている。

父 敏男さんと協力して農業を営み、農協職員でもある康之さんには、当事者と指導者を兼ね備えた優れたバランス感覚を感じた次第である。

兵庫県丹波市市島町

地元農協の指導もありオリゼメートを長く使い続けているが
とにかく箱処理剤の持続性には信頼感をもっている



尾松さん2世代

善男さん
(昭和20年生まれ)
善彦さん
(昭和51年生まれ)

写真は善男さん

丹波市は兵庫県の東部に位置し、瀬戸内海と日本海のほぼ中間部に位置する山間にある。加古川水系の最上流、由良川水系の最上流に位置する。市島町は丹波市の北東部にある。水清く豊かな里である市島町には4件の造り酒屋がある。標高100m前後の盆地に、田畑が広がり、酒米の作付けが多い。



尾松善男さんは、昭和47年頃より先代である種雄さんを手伝い、農業に従事した。その頃の水稻品種は「日本晴」。比較的いもち病に強かったが、天候次第ではいもち病が多発し、種雄

さんの苦労が記憶にある。今は請負も含め約5haの全てが「コシヒカリ」である。10年ほど前から、地元農協主導のもと、「コシヒカリ」の特別栽培に取組み、丹波産特栽米コシヒカリを『夢たんば』と称し、ブランド米として市場流通に供している。

コシヒカリ栽培には苦労話がある。天候や肥料の加減では下位節間が伸長し過ぎ、倒伏しやすくなることである。こんな特性から地域の生産者はコシヒカリを『コケヒカリ』などと呼んでいる。

オリゼメートとの出会いは昭和50年代後半。地元農協は粉剤から粒剤の指導を強化していた。当時は殺虫剤を箱処理して、6月下旬頃、本田でオリゼメートを撒いていた。今はオリゼメートの箱処理剤を田植機で移植同時処理している。

本田散布の頃は生産者によっては手抜きをし、時にはいもち病が発生したが、箱処理剤導入後は、ほぼきちんと処理されており、いもち病の発生は少なくなった。

地元農協の指導もありオリゼメートを長く使っているが、とにかく箱処理剤の持続性には信頼感をもっている。

他の病気について尋ねると、一部で白葉枯病が発生しているが、オリゼメートで予防可能である。また、紋枯病が増加傾向と聞くと、善男さんの水田ではほとんど発生はないという。



苦労話を聞いた。草刈と水管理とのこと。草刈は歩行型の草刈機を使うが、今年に入り既に5回。腰痛の種である。水管理は水利組合の役員を担っていることから、河川至近の水田は良いが、高い水田へはため水からの供給となり、調整に苦労するという。

水清く、大気清浄にして、陽穏やかな山里で、淡々と生きる尾松さんに、日本の原風景が育んだ揺るぎない命をみた思いである。

大分県豊後大野市犬飼町

効果は非常に安定していた 耐性菌が出にくいという
オリゼメート独自の特徴は非常に目新しかった



写真は孝範さん

八坂さん2世代

百人さん
(大正12年生まれ)
孝範さん
(昭和31年生まれ)

八坂さんが生まれ育った大分県豊後大野は県中央部に位置し、日本滝百選に選ばれた原尻の滝、沈墮の滝や名水百選に選ばれた白川山がある、県内でも有数の水に恵まれた土地である。

それに加えて、九州では寒さが厳しい大分県内にあって年中比較的温暖な気候であることから、水稻栽培のみならずピーマン、かんしょ等園芸作物や大分の主力ブランド牛である豊後牛など様々な農畜産物の生産が行われている。

八坂さんがオリゼメートと出会ったのは豊後大野管内での青空教室にて指導員の先生方がオリゼメートを推進していた頃とのこと。

そのころ抵抗性誘導という言葉は聞きなじみもなく半信半疑であったものの、実際に百人さんが使ったところその効果は非常に安定していた。耐性菌が出にくいというオリゼメート独自の特徴も非常に目新しかったという。

それ以来百人さん、孝範さんともに特にいもち病で困った記憶もなく、全国的に大不作とい

われた平成5年の際もいもち病の発生は目立たず、ほぼ例年通りの収量が得られたとのことであった。

現在はビルダープリンス粒剤を使用しており長期箱剤の存在は兼業や大規模農家の強い味方になっている。この経験から厳しい気候に左右されない安定したオリゼメートの効果は確信に変わり、現在でも安心して使用を続けている。



自らが生産者でありながら、JAの営農指導という立場からも豊後大野地域の生産者へ向けオリゼメートを使用した安定した水稻栽培技術を普及して下さっており、当地域の生産量安定へ尽力している孝範さん。

定年後は豊後大野地域の豊富な水をさらに活かし、犬飼地区初となる農業法人を組織し更なる水稻等農作物の安定生産に尽力したいとのこと。

「私の人生は農業とともに！」これからの厳しい国内農業情勢に立ち向かう強い意気込みが感じられた。

オリゼとは早期水稲からの付き合い 今では普通期水稲もきゅうりにも



日高さん3世代

房男さん
（大正10年生まれ）
順一さん
（昭和23年生まれ）
正浩さん
（昭和51年生まれ）

宮崎県は日本一早い早期水稲から生産量日本一のピーマンなど農業が盛んな県である。

日高さんが農業を営む宮崎市池内町は市中央部よりやや北部に位置し、市中心部からも近いが、のどかな田園風景や園芸ハウスが見られる。早期水稲、普通期水稲、施設園芸があり年中農業が盛んな地区である。

日高さんは現在、早期水稲を6ha、普通期水稲を2ha、施設園芸を40a栽培している。

祖父の房男さんは昭和7年から父の順一さんは昭和39年から、そして息子である正浩さんは平成16年から親子3代で農業に従事している。房男さんは92歳まで現役であり、今もお元気な姿が印象的であった。

水稲栽培の歴史を伺うと、昔は「ズイホウ」、「日本晴」を栽培していたが、昭和53年ごろから早期水稲「コシヒカリ」、普通期水稲で「ヒノヒカリ」を栽培している。「水稲栽培のやり方も時代とともに大きく変わった」との順一さん談。就農当時は「田植機やコンバインはもちろん、トラクターもなく、全て人力や牛などで作業を実施していた」と当時を笑いながら振り返っていた。「そういえば昔は田植えや稲刈りの時は学校が公休だった」と当時は家族一丸でやっていたという。



大きな転機は早期水稻を作り始めたころからだという。オリゼメートとの付き合いも含め当時を振り返ってもらった。オリゼメートは普通期水稻における台風後の「白葉枯病」対策で使用していたが、本格的な付き合いは早期水稻を導入し始めた昭和

56年ごろからとのこと。当時は普通期の「日本晴」を栽培していたが、台風被害の軽減と早場米としての価格安定を狙い早期水稻「コシヒカリ」の栽培へ変更した。早期水稻を栽培し始めると、今までの普通期水稻では問題にならなかったことが顕在化したという。「収穫時期の倒伏と「いもち病」の発生が問題となった」との順一さん談。早期水稻でオリゼメートを使用するきっかけとなったのは、昭和56年、迫田(山間部の谷の田)でオリゼメート粒剤を試験し効果が良かった情報を順一さんが得たことに始まる。

その後、薬剤の進化により育苗箱施用剤の「Dr.オリゼ箱粒剤」などを早期水稻で現在も使用しており、普通期水稻では平成24年から「ビルダーフェルテラチェス粒剤」を使用している。施設園芸も昭和45年ごろからはじめ、現在では「オリゼメート粒剤」などをきゅうり斑点細菌病対策で使用している。水稻から園芸作物までオリゼメートを使用し、水稻の「いもち病」やきゅうりの「斑点細菌病」で「大きな問題になったことはない」とのうれしい評価を得た。



順一さんに「現在、稲作で一番苦勞することは？」との質問に対し「雑草管理と水管理です」との答えが返ってきた。また「この頃困っている病虫害は？」との質問に対し、「いもち病、紋枯病、斑点米カメムシ、ジャンボタニシ(スクミリンゴガイ)、ウンカ類」という。

最後に今後の経営方針について質問した。順一さんからは「稲作の状況や行政の流れをよく見ながら今の流れを継続していきたい。また、来年度から飼料米も導入していく」とのこと。また、最後に日高氏より「オリゼメートをこれからも使用していきたい」と温かな言葉を頂いた。

日高さん親子3代で元気に写真に写る姿に強い絆を感じた。